

PROJECT

【2020年度 make.f ARCHIVES】人、企業、まち編

これまでにmake.fプロジェクト参加したメンバー・企業たちは多方面で活躍を続けています。このうち福井県内でのアクションについて、2020年度に福井新聞で記事化されたものを時系列でピックアップしてみました！

▼2020.04.29

2017XSCHOOLパートナー企業の荒井さんが、県産シルクを使ったマスクなどのD2Cをスタート。購入者に同封するショップカードを2019XSCHOOLから誕生した「ノカテ」チームが担当しています。



XSESSIONS

2021 PROJECT
ARCHIVE

2020 PROJECT
ARCHIVE

2019 PROJECT
ARCHIVE

2018 PROJECT
ARCHIVE

2017 PROJECT
ARCHIVES

2016 PROJECT
ARCHIVES

CONTACT



荒井などが開発した「洗えるシルクマスク」＝福井市文京1丁目の同社

伝統羽二重マスクに

荒井(福井)など県内絹織物業者

洗濯可能、あす発売

新型コロナウイルス感染拡大でマスク需要が高まる中、シルク(絹)専門の織維産元商社の荒井(本社福井市文京1丁目)は、県内の絹織物製造業者と協力し「洗えるシルクマスク」を開発、30日から同社のオンラインショップで販売を始める。福井産地伝統の「羽二重」織物を使い、肌に優しいのが特徴。

新型コロナウイルスの影響で、一般的な不織布のマスクを長時間着用することが増え、肌荒れに悩む人が出てきているという。消費者やメーカーから天然素材のシルク製マスクを求める声があり、絹織物製造の山直織物(鯖江市)、浴衣帯製造の小杉織物(坂井市)とシルク生地改良を重ねて開発した。

マスクは横17・5センチ、縦15センチ。表地は山直織物が担当し、水でぬらして織る伝統の「ぬれよこ」技法を使った羽二重で、洗濯してもマスクの形状をしっかりと保つ。裏地のシルク生地は

小杉織物が担い、ガーゼのように通気性が良い二重織「風通織り」で仕上げた。高密度フィルターやノーズワイヤも入っている。

1枚1800円(税別)。まず約5千枚を製造する。売上金の一部は新型コロナウイルス感染者の治療に当たっている県内医療機関への支援金として寄付する方針。

荒井の荒井章宏社長は「福井の伝統技術とシルクならではの特徴を組み合わせ、肌触りの良い、洗って使えるマスクに仕上がった。今後はシーズンごとに違った風合いのマスクを製造するなどしていきたい」と話している。

購入は同社のオンラインショップ＝<https://arai-silkshop/>(青木伸方)

▼2020.06.24

2017XSCHOOLパートナー企業のタッセイさんが、木製品製造企業をグループ会社化し業務拡大。タッセイ社長の田中陽(2016make.fの中小企業の採用力強化プログラム参加メンバー)は、地元経済団体で事業承継問題にも取り組んでいます。同社は中小企業庁の本年度「はばたく中小企業」にも選ばれました。

福地(福井)をグループ会社化

幼児用施設向け木製品製造



タッセイの田中陽介社長(右)と福地の福地永芳社長＝23日、福井新聞社

タッセイ 承継協力、業容拡大も

建物内装工事、住宅建材
卸のタッセイ(本社福井市
河増町)は23日、幼児用施

設向け木製品製造を手掛ける福地(本社同市三尾野町)と業務資本提携を結び、グループ会社化したと発表した。業容拡大を目指すタッセイと、事業承継に悩んでいた福地の双方の思いが合致した。

福地は1909年創業の

木製家具製造の老舗で、近年は全国の幼稚園や保育園向けの木製棚などの製造に強みを持つ。

福地の福地永芳社長(61)は後継者不在と今後の事業展開に悩む中、福井銀行に相談。昨年11月にタッセイを仲介され、両社は事業承継問題の解決と事業のシナジー(相乗効果)が見込めるとして資本提携に合意した。

今月17日に福地の株式100%をタッセイに譲渡。代表取締役会長にタッセイの田中猛雄会長が就任し、福地氏は代表権を持たない社長に就いた。

タッセイの田中陽介社長と福地社長が23日、福井新聞社を訪れ、滝本光男・営

業企画局長らと懇談。田中社長は「新幹線県内開業を見据え、建物内装工事に関連した家具製造をもっと伸ばしたいと思っていた。資本提携により、生産能力が高まる」と強調。福地社長も「会社として岐路に立っていたが、これで戦略的な新事業展開ができる」と述べた。(青木伸方)

▼2020.08.03

2019XSCHOOLに参加後、今年4月に岩手県Uターンした村上純一郎さんが、福井市のキャリア教育事業でコーディネーターを務めました。

理想のまち ギャップは

福井で第4回「コノマチクラス」

行動向け 高校生意見交換

福井市の高校生たちが自分のまちの理想像を考え行動する福井市の「ワクワク学校」コノマチクラス」は2日、前期最終回となる第4回ワークショップを開いた。生徒たちが、まちの現状を知るためのアク

シヨンプランを発表。夏休み中に取り組み、理想のまちの実現に向けた課題を探る。この日は「ほしいけどない」「いらないけどある」など理想のまちと現状のギャップについて考察し、そ

の原因が何かなど考えを深めた。生徒たちは「空き家が多く印象が暗くなる」「若者が少ないのは良さを知らないからでは」など意見を交わした。その上で「駅前にいる人たちの年齢層を調査する」



理想のまちの現状を調べるアクションプランをオンライン会議で発表した「コノマチクラス」のワークショップ＝2日、福井市中央3丁目のビル内

「なぜ運行しているバスが少ないのか企業に聞いてみたい」など、理想像とのギャップを体感するための行動計画を発表した。駅前エリアで欲しいものが手に入るかを調べたいと発表した谷口由姫さん（仁愛女子3年）は「自分の好きなまちのために何ができるか考え行動したい」と話していた。コーディネートを務める村上純一郎さん（28）大野市出身は「行動を通し新たな発見、気づきにつなげてほしい」と呼び掛けた。コノマチクラスは、将来も福井に関わる人材の育成へ福井市移住定住推進室が初めて企画。市内8校の16人が6月から、ワークショップを通してまちの理想像を考えてきた。新型コロナウイルス感染予防のためオンライン会議で行っている。後期は9月13日から再開し、最終回の12月には市への提言をまとめる予定。（児島崇之）

▼2020.08.13

XSCHOOLプログラムディレクターの坂田守史さんらが、地域とアートをつなげアーティスト支援を行う有志による団体を設立。

芸術文化で地域豊かに

芸術文化を通じた豊かな地域づくりを探ろうと、県内有志が団体「アーツ&コミュニティふくい」を18日に設立する。美術や音楽、演劇など各分野の若手アーティストや鑑賞者らが集い、芸術文化を暮らしに身近なものにするための対話ができる場をつくる。分野を横断して芸術文化の具内情報を集約するポータルサイトを開設し、アーティストの創作を支援する。（細川書）

団体の代表理事を務めるのは、美術作家の浅野桃子さん（福井市）。理事には文化政策研究者の朝倉由希さん（同）、編集者の齋藤理子さん（同）、デザイナーの坂田守史さん（同）が就く。会員として若手アーティストや芸術愛好家らさまざまな立場の人を募っていく。すべての芸術分野を対象にして創作支援や地域活動に取り組む団体は、県内で初めてという。

美術や音楽、演劇 分野横断

県内有志 団体設立へ

—— アーツ&コミュニティふくい

ちは「芸術文化は個別活動が多いけれど、それでは広がりや成熟がな、ネットワークが必要（浅野さん）。「今までは対話できる場がなかった。集まった人と声を出し合って、何ができる

サイトで発信、若手支援も

かを一緒に考えていきたい」（坂田さん）と思っている。

活動の端緒として、県内の芸術文化の情報を総合的に発信するポータルサイトを年度内に開設する。展覧会や公演などイベントを一括掲載して告知を手助けするほか、各アーティストの活動状況や創作への思いを紹介して、ファン開拓につなげる。

飲食店に絵画などの作品を展示して販売する機会をつくる事業「アートダイニング」を10月から開始。若手作家に無料で発表の場を提供し、店舗には顧客開拓の機会にしよう。団

体が双方を募集し、マッチングしていく。アーティストと鑑賞者のつなぎ役を担う人材育成、子どもたちへのアート教育にも取り組む。設立総会を18日（福井市）内で開く。県文化課が監事

として参画し、活動を後押しする。文化庁地域文化創生本部研究官を務める朝倉さんは「先行きが不確実で決まった正解がない時代。社会が豊かになるためには、多様な発想が求められていて、それには芸術が必要。アートを特別なものではなく、気軽に誰でも楽しめるものにするのが、福井の豊かさにつながるはず」と話している。



芸術文化を通じた豊かな地域づくりのための団体設立を準備する（右から）朝倉さん、浅野さん、坂田さん＝11日、福井市中央1丁目

▼2020.09.01

2016XSCHOOLに参加後、2018年に福井へUターンし、2019XSCHOOLではメンターも務めた黒川照太さんがインバウンドの新規事業をスタートしています。写真はサービスを導入した2017XSCHOOLパートナー企業の米五さん。



インバウンド事業部を立ち上げたTSUKIWAの黒川取締役(左)と、同社が代理店販売するテレビ電話型通訳アプリを導入する米五の多田常務(福井市春山2丁目の「みそ菜」)

外国人対応「今こそ」

TSUKIWA(福井) インバウンド事業部設置

コロナ収束後にらみ

6言語通訳アプリ販売

フィットネススクールのランチャイス店経営のTSUKIWA(本社福井市東区)は、黒川照元社長は、訪日外国人客に対応したインバウンド事業部を今月に立ち上げた。新型コロナウイルス感染症拡大でインバウンドは厳しい状況だが、逆に今こそ「好機」と新機軸。第一歩としてテレビ電話型通訳アプリ事業の販売代理店となり、みそ製造販売の米五(福井市春山2丁目)が直販店として9月1日にアプリを導入する。(青木伸方)

TSUKIWAは、女性専用フィットネススクールの「ランチャイス」を具内で5店舗経営。コロナ禍で本業がダメージを受ける中、あえて逆風のインバウンド事業に乗り出すと決めたのは、黒川照元取締役・事業部長(39)だ。黒川氏は、学生の約半数を留学生が占める大分県別府を離れて、昨年4月、会社

「コロナが収束すれば、訪日外国人は一気に戻ってくる。福井は北陸新幹線開業まで控えているので、逆に今が参入のチャンス」と黒川氏。インバウンドの専門部署をつくるのは、県内企業では珍しく、「オンライン」になれる、と思いたいという。テレビ電話型通訳アプリ「スマイルコール」などを展開するベンチャー企業「フューテンコサルティン」(本社京都府)と7月に代理店契約を締結。通訳アプリはビデオチャット機能を利用した24時間365日対応のサービスで、6言語を通訳する。県内初導入となる米五は、直販店「みそ菜」(福井市春山2丁目)の店頭やみそ作り体験教室、工場見学などに訪れる外国人客に対し、店員がスマートフォンで通訳アプリを使って対応する。多田健太郎常務(36)は「コロナ収束後に旅行会社などにインバウンドの営業を掛けるのではなく、収束時には外国人客を受け入れる態勢にしておくことが、たに導入の理由を話した。黒川氏は、インバウンド対応の土台となる通訳アプリの普及を促すために、各企業や店舗の需要を探り、新たなサービスを展開していく考え。「ゆくゆくは福井駅周辺で外国人客向け飲食店や宿泊事業をやっても面白い」と目を輝かせた。

▼2020.12.03

2016XSCHOOLメンバー／2019XSCHOOLメンターの吉鶴かのこさん(大阪)が、福井県丹南地域のものづくりイベント「RENEW」の商品開発プロジェクトに参加し、鯖江市の眼鏡製造企業社員らと絵本を創作しました。

子どもたちに眼鏡に親しみを持ってもらうと、眼鏡メーカーのプラスジャック(鯖江市御幸町1丁目、津田功順社長)は、製造過程を子ども向けに紹介した絵本「めがねづくりのこびとさん」を発刊した。製造に使う機械や部品を細部まで忠実に表現している。愛らしい絵柄と読みやすい文章で好評だ。(土生仁巳)

絵本で知る眼鏡づくり

丹南地域の工房開放イベント「RENEW(リニュー)」に関連した商品開発プロジェクトの一環で取り組んだ。産地企業とデザイナーがコラボして新たな可能性を探る狙いで、プラスジャック社員の楠本早矢さんがストーリーと文章を考え、大阪府のグラフィックデザイナー吉鶴かのこさんが絵やキャラクターデザインを担当した。プラスジャック社内に住む6人のこびとが夜、こっそり眼鏡を作り始めるというストーリー。絵に出てくる製造用機械は、同社で実際に使っているものを色合いまで忠実に描いた。アセテート眼鏡枠の形にくりぬいたり、

鯖江の企業、デザイナー作成



機械や部品 忠実に表現

テンブルを削ったりする様子も、分かりやすく表現している。吉鶴さんは小学生の頃、眼鏡を壊って視力低下した苦い思い出があり「きちんと矯正すれば視力は悪化しない」との思いを絵本に込めた。10月に開かれたリニューの会場で販売したところ、親子連れらに好評で約110部が売れ、その後も売り上げは伸びているという。監修に当たった津田社長は「鯖江の眼鏡企業の多くが分業制を採っており、これまで製造過程が知られていなかった。絵本を通して子どもたちが眼鏡に愛着を持ち、喜んで掛けるようになってくれたら」と期待を込める。

プラスジャックは絵本を片手に工場見学(平日午前8時半～午後5時)を楽しんでもらえたらと、絵本に登場するこびとの出入り口を社内に実際に造った。写真共有アプリ「インスタグラム」の同社アカウントでは、こびとが出入り口を行き交う動画も楽しめる。絵本はA5判、28ページ。税込1100円。同社ホームページから購入できるほか、鯖江市内の同社、めがねミュージアム、富士書店と、福井市内の「HOSHIDO」、エルパ2階「AKUSHU」で扱っている。問い合わせはプラスジャック ☎0778(53)1885。

◎絵本「めがねづくりのこびとさん」を手にする津田社長(左)と楠本さん(鯖江市御幸町1丁目のプラスジャック社)に造られた、こびとの出入り口

▼2020.09.01

2018XTUDIOパートナー企業の明林繊維さんが、XSCHOOL関係者らの紹介で勝山市施設の家具、雑貨類のテキスタイルを担当しました。

改修設計担当が縁
温泉施設に座布団
勝山、札幌の業者贈る

昨年末にリニューアルオープンした勝山市の勝山温泉センター「水芭蕉」に、その改修設計を手掛けた札幌市の事業者がこのほど、



「三木佐藤アーキ」。同社の依頼で品物を製作した明林繊維（福井市）の村上貴宣社長が届けた。受け取った水芭蕉の榎家慎一支配人は「非常にありがたい。ロビーの休憩スペースなどで活用する」と話した。

座布団は12枚、クッションは20個あり、村上社長は「生地は製造から縫製までを県内で行った」と説明する。生地はいずれもポリエステル製。水芭蕉備え付けのソファと同じ素材で恐竜の足跡柄が入っている。色もソファに合わせて、緑と白の2色とした。

三木佐藤アーキの佐藤圭代表は「統一されたデザインの内装にしたいと思っていたので寄贈した。このクッションなどをほしいという声が出て、市販にながるといいと思う」と期待した。

（桂知之）

※日付は新聞掲載日です。

【記事画像提供：福井新聞社】

いいね！ 0

CONTACT

<<< PREV NEXT >>>

Related article 関連記事



ノカテの「SUISEN Bouquet」が全国に！ チームも法人化へ。

越前海岸の水仙産地で新たな生業づくりに挑戦するプロジェクトチーム、ノカテ。2021年度はオリジナルプロダクトである「SUISEN Bouquet」のEC販売がスタートし…

[MORE >](#)



PROJECT

「トンカンテラス」の開設準備が進行中！

2019年度のXSCHOOLから生まれた、“ものづくり”をテーマにした地域の交流拠点「トンカンテラス」。当時の中心メンバーで自らの実家倉庫を改修するプラン…

[MORE >](#)

プロジェクト案がオンライン
の本年度発表会Ⅵ6



Xスクール発表会 経験、関心から事業案

県内外の若者らと福井のパートナー企業が新事業創出を目指す福井市の実践講座「Xスクール」の本年度発表会が6日、オンラインで開かれた。受講生4組が医療、福祉をより身近なものにするため、自分たちの経験や関心から生まれたプロジェクト案を披露した。都市部から若い人材を呼び込み、伝統的に人の流れをつくる市の「未来につなぐ、ふくい魅える化プロジェクト」の一環。



福祉身近に「新着想

5月1日、10日、15日、20日、25日、30日、6月5日、10日、15日、20日、25日、30日、7月5日、10日、15日、20日、25日、30日、8月5日、10日、15日、20日、25日、30日、9月5日、10日、15日、20日、25日、30日、10月5日、10日、15日、20日、25日、30日、11月5日、10日、15日、20日、25日、30日、12月5日、10日、15日、20日、25日、30日

【2020年度 make.f ARCHIVES】プロジェクト編

こちらでは本年度のmake.fプロジェクトや活動継続中のプロジェクトメンバーについて福井新聞で記事化されたものを紹介します。

2019XSCHOOLから生まれた「喜贈文…

[MORE >](#)



PROJECT

みんなの拠点「XSTAND」が完成！

2020年11月末、福井駅前にmake.f活動の拠点となる「XSTAND」がついに完成しました！ 以前よりmake.fの運営を担ってきた福井新聞社が、地域に根ざした創…

[MORE >](#)

さらに読み込む